論 説

針灸師の倫理 〈私考〉

森 一彦*

今から約25年前の針灸界は私の知る範囲内では、活気のない、陽の当らない世界であったように記憶している。

それが幸いなるかな、日中友好条約提携を期として、中華人民共和国から針麻酔という驚くべきまた信じ難い数々の臨床的知見を得て、あたかも暗夜に太陽の光をみるごとく一躍時代の脚光を浴びてきたのである。

実際のところわが日本の医学界はあぜんとし、その効果について疑心暗鬼であったことも事実である。以来各分野において針灸の原理、作用機序についてせんさくされてきたが残念ながらその治療過程についての明確な説明は、今もって把握されていない。

思うに、現代臨床医学治療の慣例は患者を機械的に検査し、規約的に投薬といったいわゆる独創性の少い画一的診療方法が大部分をしめている。

ところで25年前は、針治療をしている人はほとんど針灸師の諸先生であり、その単なる物理的な刺激をもって患者の愁訴を和らげて、回復への道を開いてきたことも記憶させるべきである。こういった事実に対してわれわれ医師では、不思議な治療法もあるものと静観し、時には催眠的ではなからうかと推察したこともあったが、確たる証拠をあげることはできなかった。

医師がその治療法について不思議な方法だと思っている時でさえ、患者は自分にとって重要なことは“自分の苦しい症状が軽減して行き体調の回復がみえてくること”の意義の方が高まいなる学界の理論より優先したことである。かくして^{どう}滔^{とう}と針灸術は治療界の花道におどり出たのである。そして基礎および臨床面の研究が年を追って盛んになり今日のような立派な学界へと発展してきたのである。ふりかえてみると、発展が早け

れば早い程、その副産物というか世の対人のあつれきといった現象も出てくるのは当然であろう。しかし今のうちにこの種の“歪”といったものを人それぞれが自覚しておかないと、折角実りかけた治療体系が根本から覆えられる時がくるのではないかと懸念される。

針治療の最もよい点の一つは、針灸師と患者の対話から生まれる人間味あふれるやりとりではなからうか。もしこれが針灸師からなくなり、あるいはおごれる余地に述べるような各項目の点に留意しなかったら、再び現代医学界の医療の荒廃のように、苦く、苦しい経験をなめなければならぬ時がくる。

さて針灸師は短期間の教育を受けた後、雨後の筍のごとく続々と診療院を開設しているが、そういう一連の機関はそれを利用する患者からみれば好ましいことである。だが、しかし数が増えれば増える程醜い争いも増加してくるのは誰もが否定できない。患者は安易な気持ちで針灸師へ、針灸師から医師へ、また針灸師から針灸師へと転々とわたり歩いてさまざまなことを訴えて行く。患者とは元来そういった人心の病の持主であると割き考えてればそれでよいが、自分の分野を互いに守っているところへ、強引に勝手な治療理論をかがけて入ってこられると、事は少し面倒になる。これから私が述べることは、内科外来に針治療を取り入れて25年間私の経験からの考案であることを先にことわっておく。

1) 針灸師は自分と同業の行った治療内容について、患者の目の前でそれを批判してはならない。相手を褒めることは一向に差支えないが相手をひぼうして、ともすれば自分をよりすぐれた術の持主だということを患者に印象づけるような言動は好ましいものではない。こういう人はいつかは自分もひどく批判されることがあるから、くれぐれも注意していただきたい。昔からいうように、みずから墓穴を掘らないように願いたいものだ。

2) 今自分の行っている針の術式はきわめて特

*Kazuhiro Mori M. D. 全日本鍼灸学会・愛知地方会学術指導部長

殊な治療であると前置して「得々、としてしゃべる人があるが、他から見ていると感じのよいものではないまた文献をみると案外その針術はやめた方が無難である」と書いてあったりする場合がある。そういう特殊針法というものは、そうざらには存在しないと私は思うのだからだろうか？ほんの一例だが「折針療法」とか「内臓直刺療法」とかいう術があるやに聞くがそういう術でなくては絶対にその疾病はよくならないものだろうか？今一度考えて反省するのが望ましい。もし医療事故につながる後遺症が起きたらどう処置するか？こういう事も絶えず頭に置いて治療してもらいたい。

3) 患者の大多数は医師と鍼灸師との区別は余りはっきりとしていない。しかし法的上ははっきりしていることは鍼灸師は医師ではないということである。

血液理学的検査を始めとするあらゆる検査をせず、また投薬、注射等を行わずしてある種の疾病に対して、かなりの成績をあげてきた鍼灸師の諸先生に対して、私は深い敬愛の念を持っている。ところが一握りの心ない人々であるが「おごれる鍼灸師、は医師の治療内容についてとかく口を挟むことがここ2～3年とみに多くなってきた感じがする。なかんずく不愉快なことは「薬は副作用が強いから今もらって飲んでる薬は飲まない方がいい」とか「注射をする医師はよくない」とかの下品で無知な批判的な言動をおくめんもなく患者に対していう人があるが、こういう人たちは心から医師の憤りと^{ひんしゆく}顰蹙をかつているのを忘れてはならぬ。それのみか投薬、注射がなくなると患者の容態が悪化する例もきわめて多い事を知っているのだろうか？そして症状急変した場合、その人は責任を取れるだけの知識と勇気があるのだろうか？くれぐれも言動は慎重に願いたい。

4) 針治療は万能ではない。また万能たり得ない。死の直前まで患者の要請とはいいいながら治療を続けている人を時にはみかけるが、なぜもっと早く医師へ患者を送らないのか。自分の腕を過信

する余りであろうか？助かるものが手遅れで助かる時期を失しとはなにもならないではないか？

5) 医師から逃避して来た患者を短期間のうちに症状を改善したからといって、鬼の首でも取ったように喜ぶのはどうであろうか？同じような症例を少くとも50例集めて好結果を収めるまでは特別に効果があったとは判定はできない。もちろん中には自然治癒ということもあるし、また突然の環境変化による治癒促進といった患者もある。特に心身症の疾病に多くみられる場合がある。こういう患者で針治療で簡単によくなる傾向を示した場合、実際施術者は一種の錯覚に近いうろたえを感じる場合がある。これを自分の腕のさえと混同してはならぬ。

6) 前者とよく似ているが、鍼灸師の中には針治療の効果の結論を急ぐ人がある。針には悠久2000年有余の歴史があり、いかに進んだ現代医学といえどもその解明には相当の年月が必要であるはずだ。一度決定をして結論を出すと引っ込みがつかぬ場合がある。わが医学界では、一度的外れの結論を出しすぎて失脚した人もかなり多い、鍼灸効果の結論を急いではならぬ。

7) 私の経験では疾病の治療はあくまで西洋医学的療法を「主」に、東洋医学的治療法は「従」として補足して始めて完璧な治療ができると確信している。この逆では時に重大な誤りを冒すことがあり患者の生命をも奪うことがあることを忘れないで欲しい。

以上簡単に私の考えを述べた。しかし、これはせっかく脚光を浴びますます発展していくであろう鍼灸界にあって日常施術者が取らねばならぬ診療態度というものについて一端を発表したに過ぎない。学会という場においてこういった倫理的事項を述べるのはきわめて異例ではないかと思われるが、こういう考えもまた将来の発展の基礎として必要な考えではなかろうか？大方の批判を待つ。

(〒464 名古屋市千種区高見一丁目22-19)

Some Considerations on the Ethics of Modern Acupuncturists

Kazuhiko Mori M. D.

Aichi

In the normal internal medicine outpatient clinic acupuncture therapy has been accepted. A scientific system of acupuncture-moxibustion therapy which could not have been imagined 20 years ago has developed. This development into a wonderful academic science should indeed be a cause for rejoicing. With the faster than fast speed of development it is perhaps natural that some mistakes and evils have also come along.

There is no need to mention that the acupuncture therapist is not a doctor. Thus he has absolutely no right to make a diagnosis or to prescribe medication.

The acupuncture therapists of today have attained prosperity through their own endeavors. It is also the fact that the acupuncturists are in part treating patients who have been deemed hopeless by Western medicine. This is thanks to the characteristic system of our country. Looking back over this acupuncture-moxibustion society which has developed so rapidly in view of the fact that ethical practices in part at least of modern acupuncture therapists are considered arrogant and distasteful by those of the medical profession, I am daring, at this time, for the sake of the acupuncture therapists, to make note of this fact, inviting the comments and criticism of my colleagues.